

### <取組と成果のポイント>

- ・家庭や地域との連携を生かした道徳教育を展開したことで地域へ一歩踏み出し、ボランティア活動を行う生徒たちが現れた。
- ・チームでの教材研究、全教員による生徒の見取りを行う体制をつくったことで、学び合い、支え合い、よりよい道徳授業を目指す教師集団が形成された。

## 研究推進校事業報告書

### 1 研究推進校の概要

学 校 名	所 在 地	電話番号	生徒数
新城市立新城中学校	新城市字滝ノ上1番地	0536(22)0257	207人

本校は、東三河の中でも、山林に囲まれた奥三河にある新城市の中心に位置する。学校の南側には、桜の名所として有名な桜淵公園や一級河川である豊川があり、四季折々の自然を楽しむことができる。また、古くから「山の湊<sup>みなと</sup>」として信州への物資の中継地として栄え、学校の教育活動に協力的な地域・保護者に恵まれている。

### 2 研究課題

#### (1) 道徳の授業の抜本的改善

- ①外部講師を招聘<sup>しょうへい</sup>した計画的な研修による道徳授業の指導方法の工夫・改善
- ②チームでの教材研究、全教員による生徒のみとりを行う体制づくり

#### (2) 家庭・地域との連携による道徳教育の充実

- ①地域を見つめ直し、よりよい生き方を考える場の設定
- ②通信、ホームページ、地域広報誌による発信、学校公開日や行事等での家庭・地域との連携

### 3 研究主題とその設定理由

「特別の教科 道徳」を要とした道徳教育の充実  
－家庭・地域との連携を生かした道徳教育の推進－

本校は、11学級（特別支援学級4学級を含む）、全校生徒207名の中規模校である。まじめで素直な生徒が多く、与えられたことについては誠実に取り組むことができる。

年度始めに全校生徒を対象としたアンケートの結果では、「思いやりの心をもって人と接している。」という設問に肯定的に答えた生徒は8割を超えた。また、「家族や多くの人の支えや助け合いで社会が成り立っていることに感謝し、自分も助けようとしている。」という設問についても肯定的な回答が多く、他者とのつながりを意識して生活をしていることが分かった。一方、「難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦する。」「自己を見つめ、自己の向上を図っている。」という設問に肯定的に答えた生徒は5割程度と低い結果となった。実際の学校生活の中でも、自分の考えはもっていても、教師の後押しがなければ行動に移すことができない生徒の姿を目にする。祭礼等の地域の行事に積極的に参加する生徒が多いにも関わらず、地域や社会をよくするために何をすべきか考えている生徒が少ないこともアンケートの結果から見えてきた。

このような現状<sup>かんが</sup>を鑑み、生徒がよりよく生きたいと願い、それを日常生活で実現するための実践力を育てる道徳教育を充実させていく必要性を感じた。道徳教育を充実させるためには、道徳授業の質を高めるとともに、家庭・地域と連携して生徒が多様な価値観に触

れる教育活動を展開することが大切であると考え。また、道徳性（道徳的な判断力・心情・実践意欲等）を高めることは、社会の中でよりよく生きていくために大切なことであり、本校が目指す生徒の姿である「**一步踏み出す さわやか はつらつ 新中生**」の育成にもつながると考え、本実践に取り組んだ。

#### 4 研究の概要

##### (1) 研究の仮説

- ・ 道徳の授業の指導方法を工夫・改善して授業の質を高めたり、教員が協働して生徒理解を深める取組を行ったりすることで、生徒たちは授業や行事等を通して、よりよく生きたいという願いをもって一步踏み出すための深い学びを得ることができるだろう。
- ・ 家庭や地域と連携して多様な価値観に触れる教育活動を展開することで、地域や社会をよりよくするために何をすべきか主体的に考えることができるだろう。

##### (2) 研究構想図



##### (3) 研究組織

- |             |                                               |
|-------------|-----------------------------------------------|
| I 授業研究部     | ①道徳授業の研究                                      |
| II 家庭・地域研究部 | ①家庭や地域との連携を生かした道徳授業のマネジメント<br>②家庭や地域との協力体制の構築 |
| III 評価研究部   | ①校務支援システムの活用による取組<br>②アンケートによる実態の把握           |

##### (4) 研究の手だて

【道徳の授業の抜本的改善】

- ①外部講師を招聘した計画的な研修による道徳教育の指導方法の工夫・改善
  - ・ 道徳教育に造詣の深い大学教授を講師として招き、『特別な教科 道徳』にお

ける指導方法の工夫・改善について研修を行う。

- ・ 全学級において『特別な教科 道徳』の授業研究を行う。
- ②チームでの教材研究、全教員による生徒の見取りを行う体制づくり
  - ・ 学年で行う道徳の時間を揃え、同教材の授業を一斉に行う。
  - ・ 学年担当でアイデアシートを持ち寄り、授業づくりを行う。
  - ・ それぞれの生徒の道徳性に係る成長の様子を把握して授業に生かすために、全ての教員が生徒の成長の様子や「よき」を多面的に捉え、校務支援システムに記録し、共有する。

【家庭・地域との連携による道徳教育の充実】

- ①家庭や地域を見つめ直し、よりよい生き方を考える場の設定
  - ・ 新都市の教育憲章にある「共育（共に過ごし、共に学び、共に育つ）」の理念のもと、地域の人材を積極的に招き、地域の人・歴史・自然・文化を活用した授業を計画する。
  - ・ 学校の行事と学年のイベント、地域の伝統的な行事等を学年主任が把握し、教科書教材とリンクさせた年間カリキュラムを編成する。
- ②通信、ホームページ、地域広報誌による発信、学校公開や行事等での家庭・地域との連携
  - ・ 共育の日（授業参観）で、地域に広く呼びかけ、道徳授業を保護者や地域の方に公開する。
  - ・ 道徳授業の様子を、通信やホームページに掲載し、保護者や地域の方と思いを共有する活動を行う。

## 5 研究計画

月	実施内容
4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 研究組織、研究計画の策定</li> <li>・ 研究推進委員会（校内研究組織発足、研究の方針・研究主題・研究仮説・研究の手だて・年間活動計画等の検討）</li> <li>・ 校内研修会①（研究目的・内容の周知と共通理解） ・ 授業研究会①</li> <li>・ 生徒、教員、保護者への道徳アンケートの実施（実態把握）</li> </ul>
5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 研究推進委員会</li> <li>・ 校内研修会②（外部指導講師 愛知教育大学 鈴木健二氏）</li> <li>・ 授業案検討会①（授業案作成） ・ 授業研究会②</li> <li>・ 第1回意識調査（県教委作成）及び生徒、教員のアンケート（本校作成）</li> </ul>
6	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 研究推進委員会</li> <li>・ 授業研究会③④</li> <li>・ 道徳科授業参観の実施（保護者への道徳アンケート）</li> <li>・ 地域との連携を生かした講演（地域講師 弁護士 原 佑太氏）</li> <li>・ 地域との連携を生かした体験活動（地域講師 新城はぐるまの会）</li> <li>・ 地域との連携を生かした体験活動（地域講師 新城有教館高校農業クラブ）</li> </ul>
7	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 研究推進委員会</li> <li>・ 校内研修会③（地域講師 軽トラ市スタッフリーダー 森 一洋氏）</li> <li>・ 授業案検討会②（実践発表、成果と課題の共有）</li> <li>・ 地域との連携を生かした授業（地域講師 田村組代表取締役社長 田村太一氏、 瀧川オブラート代表取締役 瀧川紀幸氏）</li> </ul>
8	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 研究推進委員会 ・ 校内研修会④ ・ 授業案検討会③（授業案作成）</li> <li>・ 校内研修会⑤（外部指導講師 愛知教育大学 鈴木健二氏）</li> </ul>

9	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業研究会⑤</li> <li>・地域との連携を生かした授業（地域講師 同窓会理事 長田共永氏）</li> <li>・地域との連携を生かした授業（地域講師 軽トラ市スタッフリーダー 三輪信之氏）</li> </ul>
10	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業研究会⑥</li> <li>・地域との連携を生かした授業（地域講師 新城子ども食堂主催 加茂 旬氏）</li> <li>・市学校訪問「みがく」（外部指導講師 愛知教育大学 鈴木健二氏）、研究協議会</li> <li>・授業案検討会④（実践の結果を発表、成果と課題の共有）</li> </ul>
11	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業研究会⑦</li> <li>・地域との連携を生かした授業（地域講師 ミュージシャン 上條 頌氏）</li> <li>・地域との連携を生かした体験活動（地域講師 新城有教館高校農業クラブ）</li> </ul>
12	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究推進委員会</li> <li>・授業研究会⑧</li> <li>・校内研修会⑥（実践の振り返り）</li> <li>・地域との連携を生かした体験活動（地域講師 新城有教館高校農業クラブ）</li> <li>・生徒、教員、保護者への道徳アンケートの実施（成果の検証）</li> </ul>
1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校内研修会⑦（研究のまとめ作成）</li> <li>・研究推進委員会</li> <li>・第2回意識調査（県教委作成）及び生徒、教員のアンケート（本校作成）</li> </ul>

## 6 これまでの取組と成果

<校内研修での取組>

### （1）道徳授業の指導方法について

5月の校内研修会では、愛知教育大学の鈴木健二氏をお招きし、道徳の授業をつくる上で意識すべきことについて講義を受けた。そこで、「生徒の認識の変容を促すこと」「教師自身が価値観を深めること」が重要であると教えていただいた。また、以下の4つのポイントを意識した授業づくりを提案された。



【鈴木健二氏からの学び】

- ・その教材ならではの「ねらい」を設定する
- ・教材に興味をもたせる（問題意識を高める）
- ・思考を刺激する発問を工夫する
- ・身近な問題として意識付ける

8月の校内研修会の講義では、10月16日の市教育委員会の学校訪問「みがく」で扱う教材についてご指導いただいた。教材は、日清食品の創設者であり、カップヌードルの開発者である安藤百福氏の生涯を取り上げたものである。授業者は、安藤百福氏の生き方には特別感があり、百福氏の生き方を生徒が身近なものとして捉えるには難しいのではないだろうかという心配を抱いていた。しかし、この研修を通して、偉人を扱った教材をどのように生徒の身近なものにするか、多くのヒントをいただいた。

### （2）授業の質を高める教材研究

鈴木健二氏の講義を受けた後、担任が自発的に教材研究のメモやアイデアシートを同学年の担任と共有し、授業づくりを始めた。本校は今年度より全校が同じ時間に道徳の授業を行うことにした。また、学年主任が学校行事や学年の実態、地域のイベントや祭礼、行事等を把握し、教科書の教材をいつ学習するのかを明記した年間スケジュールを作成した。このカリキュラムは定期的に更新した。同じ時間に同じ教材で道徳の授業を行うことで授業づくりを学年



【授業づくりをする教員の様子】

担当で検討しやすくなった。

学年担当で自発的に道徳の授業づくりを検討したのちに実践を行うと、同じ教材で同じような授業プランで授業を行ったにも関わらず、生徒の反応はそれぞれの学級で大きく異なっていた。道徳の授業が終わった後の教師は、隣の学級の板書を見たり、生徒の書いた振り返りを見比べたりとすすんで自分の授業を検証する姿が当たり前のように見られるようになった。さらに、授業で表出した生徒の道徳的な判断力・心情・実践意欲を次の行事や活動に生かすための手だても話し合い、次時の道徳の授業計画を練り直していた。また、授業研究部からは、単に学級だけで道徳の授業を行うのではなく、学年全体や学校全体で行う授業があってもよいのではないかというアイデアも出された。実際に学年道徳については、行事前や学期末に、学校全体道徳については、11月にゲストティーチャーとして地域講師のミュージシャン上條頌氏を招き、実施した。

### (3) 全教師による見取り

年度当初の研究推進委員会で、「認識の変容は発言やワークシートから読み取ることができが、授業後に行動の変容が表出しても、それを担任だけで把握することは難しい。」との意見が出た。そこで全職員で生徒の「よさ」を見取り、行動に表れた場面を捉えて、校務支援システムに記録していくことにした。一人の生徒を全職員が意識して見取ることによって生徒の変容を多面的に捉えられるようにするためである（1月15日現在で230件以上の記録が校務支援システムに書きためられている。）。また、道徳授業では、授業を受けもっていない教員が教室を回り、担任とは違った立場で生徒の発言の様子やつぶやき等を拾い、タブレット端末を活用して記録を残した。記録はクラウドの「教員共有フォルダ」に即時にアップロードすることで担任と共有した。

### (4) 地域の人材の活用

7月の校内研修会では、全国3大軽トラ市の一つ、「しんしろ軽トラ市のんほいルロット」スタッフリーダーの森一洋氏を講師に招いた。講義では、軽トラ市の成り立ちを通して森氏の地域貢献に関する考え方を聞かせていただいた。

また、「ボランティア活動は、やりがいを感じられれば一番よい。軽トラ市のボランティアスタッフは、本人も楽しんでいて、まわりの人たちのためにもなっている。出店者や来場者からも感謝される。中学生にとっても自己実現の場となりやすいと思うので、中学生のボランティアの参加を募りたい。」という話が出た。



【地域人材からの学び】

## < 1年生の実践 >

地域の方の助けを借りて行う体験活動と授業を結び付け、「道徳教育」に生かす工夫

- ①「福祉」に携わるボランティア活動をする地域の方にゲストティーチャーを依頼する。
- ②授業と福祉体験教室のワークシートを1枚にまとめ、認識の変容が見える化する。

### (1) 授業の様子

〔主 題〕 たがいに支え合う社会（C 社会参画）

〔教 材〕 「今度は私の番だ」

〔ねらい〕 佐藤真海氏（パラアスリート）の生き方を通して、社会参画や社会連帯の意義を理解し、社会参画に対する意欲を育てる。

まず、真海氏の生き方を本文から読み取った。癌<sup>がん</sup>を発症し右脚を失うが、パラリンピックに出場したことや全国の小中学校で講演をしたり、東日本大震災では、炊き出しや支援物資を届けるボランティアを始めたりしたことをおさえた。その後、「メッセージを受け取る子どもたちの笑顔を見て、真海さんはどのようなことを感じたのだろう。」という発

問を生徒に投げかけた。「自分の行動で笑顔になってくれてうれしい。」「これからボランティア活動を積極的にしてみたい。」という発言があり、ボランティア活動の意義や価値について迫ることができた。生徒の振り返りには、「この社会は支え合いで成り立っているので、真海さんのようにボランティアを進んでやる人が増えるとよいと思いました。僕も笑顔が絶えないそんな社会にしていきたいです。」とあり、すすんで社会に関わろうとする意識が芽生えたことが分かる。

## (2) 福祉体験教室

生徒たちは、手話教室、要約筆記教室、ガイドヘルプ教室、車いす体験教室の4教室から2つを選んで体験した。それぞれの教室で実際に助けを必要とする方の立場を体験した生徒たちの振り返りには、「実際に体験してみて、想像していたよりも困った。どれだけの助けが必要か分かった。」「困っている人を見かけたら率先して助けたい。」などと綴られていた。道徳授業での学びが、地域の方の協力のもと行われた体験活動を経て、さらに深まったことが分かる。体験活動の最後に、地域の方から「中学校でこのような時間を設けてくれてありがたかった。」「この経験を忘れずに障がい者に寄り添うことができる人になってほしい。」というメッセージをいただいた生徒たちは、地域の方々が学校や中学生に寄せる期待を感じ取っていた。



【地域のボランティアから学ぶ体験活動】

## < 2年生の実践 >

### ゲストティーチャーを招き、職場体験と道徳授業をつなげる工夫

- ①身近な「働く人」として保護者や地域で活動する方にゲストティーチャーを依頼する。
- ②職場体験や地域の活動とも関連させ、授業で考えたことを生かす場を設定する。

#### (1) 授業の様子1

〔主 題〕働くってどういうこと？ (C 勤労)

〔教 材〕「地域で活躍する人々」

〔ねらい〕 保護者から働くことについて話を聞くことで、生徒が働くことについて考えるきっかけとしたり、よりよい社会を築こうとする気持ちを高めたりする。

職場体験学習に向け、保護者でもある市内の企業経営者2名をゲストティーチャーに迎え、「働く意義」について、それぞれの経験をもとに講話をしていただいた。その後、生徒たちは、講話の内容をもとに自分たちなりに「働く意義」について考えた。

授業は、学年道徳として2クラス合同で行い、普段は意見交流できない他のクラスの生徒とグループを作って話し合いを行った。「働くって〇〇〇ということ」という個人で考えた意見を、思考ツールを使ってまとめ、グループごとに発表した。その後、ゲストティーチャーから発表したことに対してコメントをいただき、生徒同士だけではなくゲストティーチャーとも交流をしながら「働く意義」を学んだ。生徒たちは、この授業を通して「働く意義」についての考えを深め、道徳的な実践意欲や心構えをもって職場体験学習に臨むことができた。



【企業経営者による講義】

### ゲストティーチャーの講話（地域の伝統文化）と道徳授業をつなげる工夫

- ①「伝統や文化を引き継いで行動している人」として、のんほいルロット三輪さんをゲストティーチャーとしてお招きする。

②新城市の伝統や文化を『未来に残すべきか』について考える場を設定する。

## (2) 授業の様子2

〔主題〕 祭りの夜～郷土愛～ (C16 郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度)

〔教材〕 「祭りの夜」

〔ねらい〕 地域の伝統や文化について考えたり、話し合ったりすることを通して、郷土に対する認識を深め、郷土を大切にしようとする心情を高める。

ゲストティーチャーの授業を受け、「地域を引き継いでいく人」について、生徒に聞くと、「話を聞いて地域に貢献しようと思った。」や、「新城市に戻って町おこしをする姿はカッコいい。」といった反応があった。教材を読み終わってから、「新城市の伝統や文化を未来に残すべき？」という発問を投げかけた。生徒たちからは、「残すべき、お祭りで再会できる地域の人がいるから。」や、「残さないべき、準備や片付けが大変だから。」など、それぞれの立場から考えることで伝統や文化のメリット、デメリットについて気付いた。「中学生の自分が新城市にできることは？」という発問に対し、生徒は「地域の人や友達と協力してお祭りに取り組むことで、新城が元気になる気がする。」といった参加するだけでも地域の活動に貢献していると気付く姿があった。振り返りでは、地域に貢献していきたくないと記述する生徒がおり、郷土を愛する心が育まれていることが分かる。



【ゲストティーチャーの講話】

### 【授業の振り返り】

- ・今日の道徳を通して、軽トラ市やお祭りに参加することで新城市の伝統が残っていくと思えました。新城市は大きな町ではないけれど、川がきれいで水がおいしいし、緑もきれいで自然豊かな魅力があります。人口は年々減っているけれど、軽トラ市やお祭りをやり続けることで新城市は残っていくと思えます。

(3) 郷土のために一歩踏み出し地域に出て活動する生徒の姿  
軽トラ市「のんほいロット」の活動を紹介しますと、生徒たちが運営のボランティアに参加することを希望した。生徒たちは、自分たちが参加したことで運営の一助になったことを実感し、充実感を得られたようである。また、運営スタッフだけではなく、のんほいロットを訪れた地域の方や出店者と交流する姿も見られた。



【ボランティアの様子】

## < 3年生の実践 >

### 家庭（保護者）との連携を図り、親子参加型「道徳授業」を行うための工夫

- ①本時（授業参観）に入る前に、学級通信や学年通信を通して本時の概要を周知する。
- ②本時では、保護者の意見表明できる場を設定する。
- ③授業に参加しての振り返りを書いてもらい、通信等に掲載して周知する。

## (1) 授業の様子

〔主 題〕 家族の支えがあるから (C 家族愛、家庭生活の充実)

〔教 材〕 「背筋をのばして」

〔ねらい〕 どのような決断をしても、どのような状況になったとしても、自分には支えてくれる人が近くにいるということに気づき、家族への思いを深める。

授業に参加した保護者は、資料の父親のそっけない態度と比較して、自分だったらどう接するかを考え、生徒に伝えてくださった。実際、生徒の側には、父の期待や思いにこた

えられないことは裏切りという意見もあったが、「それは少し違うのではないか。」という親の立場からの違った視点での考えが出され、自分の決断に対し、生徒が前向きな気持ちになれるきっかけとなった。

「子供が夢を実現できなかったらどんな声かけをするか」と保護者に問いかけると、ある保護者から具体的なことは何も聞かずにただ「おかえり。」と言うという意見が出された。「うまくいかないことは決して親を裏切ることなんかじゃない。親は、子供の決断を尊重してくれ、もし失敗したとしても、優しく迎え入れてくれるんだ…」という温かで、ほっとした空気が教室に広がった。

改めて生徒に「自分にとって家族とはどんな存在か」を問い、ワークシートに記入させた。「成長すると両親とは離れてしまうけれど、どれだけ離れても大事な人になる。」という記述が見られるなど、家族に対して物理的な距離ではない存在感を認識できた生徒もいた。

家で話を聞いて、親の気持ちに共感していました。  
これから旅立っていく子供達の背中を押せるような  
人間になりたいと 思いました

【授業に参加した保護者の振り返り】



【授業で発言をする保護者】

### 複数の講師の生き方から「よりよく生きる」ことを学ぶ授業の工夫

- ①主題にかかわる地域人材をゲストティーチャーとして活用する。
- ②ゲストティーチャーと生徒が意見交流を図れる場を設定する。
- ③「よりよく生きる」をテーマに9時間完了の単元を組む。

【主題】 君たちはどう生きるか

(A 真理の探究・創造、向上心・個性の伸長、B 思いやり・感謝、相互理解・寛容、C 社会参画・公共の精神、郷土の伝統と文化の尊重・郷土を愛する態度、D 生命の尊さ)

【教材】 「社会からの無言の賞賛を感じる感性」「島唄の心を伝えたい」「日本から世界へ、そして宇宙へ」「ぼくにもこんな『よいところ』がある」「講師講話」

【ねらい】 取り上げる地域人材や教材に登場する人物のさまざまな生き方にふれることで、自分の思い描くよりよい生き方を実現するために必要なことは何か、これからの社会の中でどう自分を生かしていくかを考える。

#### (2) 授業の様子2

「よりよく生きる」を主題に、本校が目指す生徒像にある「一步踏み出す」ことの必要性を考えることからスタートした単元「君たちはどう生きるか」。

「郷土の伝統」に関わる授業では、地域の祭礼に深く関わってきた長田氏を講師に迎え、祭りを通じた地域文化について考える中で、「一步踏み出す」にはどうすればよいかを考えた。長田氏は話の中で「文化はなぜ大事なのか」を問い、祭礼で奉納する手筒花火を打ち上げるまでの過程を例に挙げて話をされた。花火を奉納する人は1人だが、その過程では多くの人に関わり、その協力があって初めて形となるので、見える現象だけにとらわれず、その向こう側や背景にあるものを見ることを大切にしようと呼びかけられた。「一步踏み出すにはどうするとよいか」という質問した生徒は、授業を振



【手筒花火の手ほどきを受ける生徒】



り返り、以下のようにまとめ、講師の話をつっかきかけに自分の生き方への思いを強くしていることが伺えた。

【長田さんの生き方から気づいたこと・学んだこと】  
「一歩踏み出す、というのは私だけではなく、誰もが苦手なことなんだなと思いました。でも、自分に自信を持って好きなことをつらぬき通すことでみんなに分かってもよくなるかなと思いました。一人で悩むのではなく、みんなと協力することが自分にとって一歩踏み出すのかもしれないと思いました。5分前に私は、みんなの前で意見を言うのが苦手でしたが、今日で一歩踏み出す機会を作れました。♡

長田氏の話をお聴きのち、教科書教材「島唄の心を伝えたい」を使い「郷土」について追究して考えさせた。「郷土に息づく心を伝えていく必要はあるか」との問いに対し、意見がほぼ半々に分かれたクラスもあった。「必要なし」と考えた生徒は「伝えられる人が伝えればよい」とやや人任せな意見が大半を占めた、中には、教材の語り手の生き方は共感し、自分の考えの狭量さを省みる生徒もいた。

「思いやり・感謝」に関わる授業では、孤食の解消を目標に市内で「子供食堂」を開設し尽力している加茂氏と佐野氏の両名を講師に迎え、奉仕の精神や利潤以外で人を動かす力について考えた。授業は、子供食堂が注目されるようになった始まりを皮切りに、食堂の現在の概要、2人が食堂を開設しようとしたきっかけについて語られた。注目されたのは、2人を突き動かす原動力の違いである。加茂氏が「人の笑顔を見るのが何より」と語ったのに対し、佐野氏は「人の笑顔では自分の気持ちは動かない」と語ったことである。目的の違う二人が協同的に活動を行っていることに対して、多くの生徒が新鮮な驚きをもったことが振り返りによく表れていた。



【講師と対話する生徒達の様子】

「君たちはどう生きるか」を主題として学習してきた最後は、これまで取り上げてきた人物の中から、自分が最も心に響いた人物の生き方について改めて考える機会を設けた。また、「よりよく生きるために大切なこと」の学習を終えて自分の考えの変化が分かるようにワークシートに記入し、それをもとに「私はこう生きる」の題名で文章にまとめた。

## 7 研究の評価

### (1) 研究の成果

生徒たちは、道徳の授業や道徳的な体験活動を通して、本校が目指す生徒像にある「一歩踏み出す」とはどういうことなのかを再考してきた。学校生活だけではなく、学校生活以外の場面においても、自分にとっての「よりよい生き方」を考えることが「一歩踏み出す」ことにつながっていくことに気が始めたように感じる。実際に軽トラ市のボランティア活動に参加する生徒（8月～12月、計50名以上の生徒がボランティアスタッフとして参加）が出てきたことや、地域の方の支援に感謝して花を贈ろうと行動する姿が見られたことは、前年度には、見られなかった「一歩踏み出し

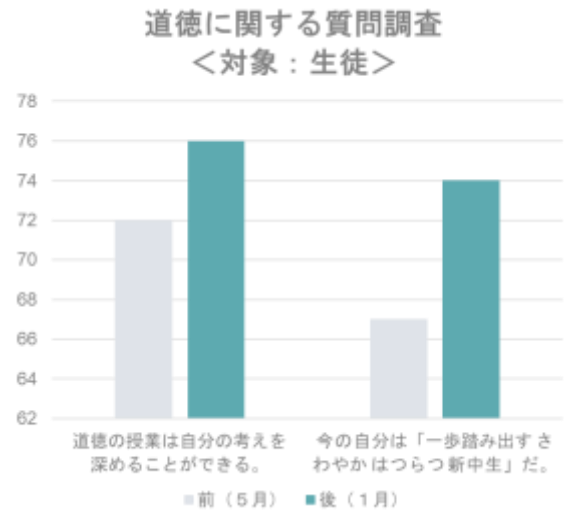


【感謝の気持ちを込めて地域の方へ寄せ植えを贈る生徒】

た」生徒の姿であった。また、道徳の授業を楽しみに待つ生徒の声が自然と聞こえてくるようになった。これは、教師が道徳の授業をチームで準備し、よりよい授業をしようとする姿勢の成果だと考える。これまで協力いただいた地域の方や保護者からは、「中学生の考えを知ることでも自分も改めて考えさせられたのでありがたかった。」と感謝の言葉をいただき、生徒だけでなく地域や保護者にも響くものがあることも分かった。

生徒、教員のアンケート（5月、1月実施）を分析すると、本校職員の道徳教育への取組の意識が向上したことが顕著に表れていた。生徒アンケートより、「道徳の授業は自分の考えを深めることができる。」と考える生徒が増え、「今の自分は『一步踏み出す さわやか はつらつ 新中生』だ。」の設問に肯定的に答えた生徒が増えた。また、ある生徒の授業の感想には「最初は、生き方なんて言葉で表せないと思っていたけれど、深く考えていくうちに段々と表せるようになっていって道徳はすごいなと思いました」とあった。

道徳の授業の指導方法を工夫・改善して授業の質を高めたり、教員が協働して生徒理解を深める取り組みを行ったりしたことで、よりよく生きたいという願いを求めて一步踏み出すための深い学びを得ることができた生徒が現れたことは、大きな成果であった。



【授業の感想】  
最初は生き方なんて言葉であらわせないと思っていたけれど、深く考えていくうちに段々とあらわせるようになっていって道徳はすごいなと思いました。

## （2）今後の課題と取組

ある生徒の授業の感想に「一步踏み出すことが重要であるということは知っているつもりだけれど、踏み出し切れなかったことを想像して怖気づいてしまう。あまりよくないと思ってはいるけれどそれでも引き下がってしまうことがあります。」とあった。

一步踏み出すことが重要であるということは知っているつもりだけれど、踏み出し切れなかったことを想像して怖気づいてしまうのは、あまり良くないと思っはいるけれど、それでも引き下がってしまうことがあります。

「今の自分は一步踏み出すさわやかはつらつ新中生だ」と言える生徒が7割を超えた一方、まだそうは言えない生徒もいる。また、保護者アンケートの「新城中学校の道徳教育の取り組みは、家庭や地域に伝わっている。」の質問は、肯定的に回答した保護者の割合が、1割向上し6割に達した。道徳教育の取組を発信し続けた効果が表れてきていることが分かる。しかし、残り4割近くの保護者には伝わっていないと考えると、情報の発信や伝え方がまだ不十分であると言える。

今後も、家庭・地域と連携して、多様な価値観をもつ人々と生徒のふれあいや対話の機会を盛り込んだ道徳の授業実践を続け、その取組を家庭や地域に広く発信し、成果を還元していくことで、学校と家庭、地域が一体となって「一步踏み出す さわやか はつらつ 新中生」を育成することを目指していきたい。